

< 珠玉編 > 心にしみるいい話 第2集

全国新聞連合シニアライフ協議会編

心にかける屋根シート 岡村和夫(カミラ カノオ)(会社員 46歳 新潟県新発田(シバタ)市)

平成7年1月17日、阪神大震災の惨状を伝えるテレビの前で彼は涙した。そして立ち上がった。「おれ、神戸へ行って来る。ボランティアで何か役立ちたい」。「馬鹿なことはやめろ！一人で何が出来る」と言う親の反対を押し切って、1月23日早朝、彼は旅立った。

被災地灘区へ来てみたがあまりのひどさにどうしていいのかわからない。気持ち一つで飛び出して、行けばなんとかなると甘く考えていた。新潟市のエアドーム型のテントを見つける。市の緊急医療班はみんな殺気立ったような雰囲気、次から次へと運ばれてくる患者に対応している。

水や食料の配給の手伝いをする。「水がきた！」と大勢の被害者が集まってくる姿にショックを受ける。次に避難場所で発生するゴミを燃やして処理をする仕事を見つける。1斗缶を焼却炉にしてゴミを集める。初めは一人だったのが、いろいろな人から声をかけられるようになった。

他に自分のできる仕事はないかと探し回った。地震で残った家もほとんどが屋根に瓦がない。雨が降ったら大変である。生まれて初めて命がけで自分の家の屋根に上がったというおじいさん。別のあばあさんは途方にくれていた。「シートを張ってあげましょうか？おれ、板金屋だから上は平気です」。屋根に上がり、シートをかけて釘で打ち付けていく。一日二軒がやっとである。

その家のおばあさんは仕事が終わるまでずっと手を合わせて無事を祈ってくれていた。「何もお礼をしてあげられない。これで手を洗ってください」と、大切な飲み水を差し出す。「腹がへったでしょう。せめてこの配給のパンを食べてください」と言う。「おばあちゃん、おれ、テントに行けば食べ物があるよ」と言ってもきかない。自分が食べるたった一つのパンを手を持たせる。

話を聞いてあちらこちらから仕事の依頼がくる。ボランティアでやっているのに、ある業者はシートをかけて重しを置くだけで一軒につき7万5千円取っていると聞いて腹立たしかった。毎日屋根に上がってシートを張る。風呂なんてまったく入れない。11日間いたがその間、靴下を2回替えただけである。

4、5日すると水が出た、電気がついたと家に呼んでくれる人がいた。一番最初に出会ったおばあさんである。「あんたのためにボランティアの保険に入ってあげたよ。持って行きなさい」と言うおばあさんの、明るくなった笑顔が何よりもうれしい。現地では材木も道具もなかったのだが、それぞれの家の人がこれを使ってほしいとヌキ板などを持って来てくれる。

多くの被災者が「私たちは家も金も無くなったが、人と人との繋がりができました。それを宝にこれから生きていきます」と言っていた。「新潟へ帰っても、結婚したら必ず花

嫁さんを見せに来てね！」 - そうおばあさんに約束させられた。心配している母に電話する。「母ちゃん、おれ、今まではイヤイヤだったけど、父ちゃんのトタン屋を選んでほんとうによかったよ！」と彼は言う。

「自分がやったことは小さなことです。でも抱えきれないくらい大きなものを、大勢の人たちからもらいました。いろいろなことを学び、気付かせてもらえました。私のほうこそありがとうございます」

今、その青年は吉田町で板金の仕事に毎日頑張っており、今年(平成9年)の6月に花嫁を迎えた。